

「つくばエクスプレス」に乗って

若林幹夫著『郊外の社会学 現代を生きる形』の第3章「郊外を縦断する」の最初に「つくばエクスプレスに乗って」がある。郊外化の進展と中心市街地の空洞化に関心があり、この本を手にしたが、とりわけ「つくばエクスプレス」(TX)の沿線郊外の現実が興味深かった。

TXは1995年「常磐新線」として着工され、2005年8月に開業した。TXは「大都市地域における宅地開発及び鉄道整備の一体的推進に関する特別措置法」(宅鉄法)にもとづき、鉄道整備と沿線開発のまちづくりを一体的に進める総合的なプロジェクトであり、新しい駅を中心に大規模な土地区画整理事業による新しいまちづくりが推進されている。



東京出張のうちに、秋葉原からTXに乗って終点の「つくば駅」まで行った。地下深くから地上に出ると、埼玉・千葉・茨城と3県にわたる郊外を走り抜けて行った。『郊外の社会学』のような観察はできなかったが、沿線開発が進む郊外地域を概観できた。終点「つくば駅」はかなり前に土浦からバスで行ったことがあるが、「筑波研究学園都市」



の玄関口としてオフィスビルや大型店、住宅などが整然と立ち並んでいる。現在、筑波研究学園都市は31の研究機関をはじめ、周辺の工業団地に進出した民間の研究所などを合わせると約300に及ぶ研究機関や企業が立地し、2万2000人あまりの研究者を要する科学技術の集積地という。筑波研究学園都市とともに、TXそして沿線開発の動向にも注目していきたい。

(2007年5月2日 記)